

ローザとサトペンが交わる午後
——『アブサロム、アブサロム!』の隠れた中心——

楠元淳平

はじめに

ローザ・コールドフィールド(Rosa Coldfield)は、二十歳のときトマス・サトペン(Thomas Sutpen)に侮辱されたせいで、長年にわたる隠遁生活を送ることとなった。ウィリアム・フォークナー(William Faulkner)の『アブサロム、アブサロム!』(*Absalom, Absalom!*)を読む者であれば、だれもが知る事実だ。しかし見過ごしてはならないのは、五章において彼女がその四十三年前のできごとを語る時、「午後」という時刻にこだわっていることである。

And then one afternoon—oh there was a fate in it: afternoon and afternoon and afternoon: do you see? the death of hope and love, the death of pride and principle, and then the death of everything save the old outraged and aghast unbelieving which has lasted for forty-three years... (136 emphasis in original)

「午後、午後、午後」(“*afternoon and afternoon and afternoon*”)というリフレインからわかるように、彼女はサトペンから侮辱を受けた「午後」だけに“*a fate*”を感受しているのではない。三つ目の「午後」以前にも二つの「午後」が存在しており、それらもまた彼女にとって致命的な「死」をもたらした。「第一の午後」では“*hope*”と“*love*”が、「第二の午後」では“*pride*”と“*principle*”が、それぞれ死んだのである。

これら抽象的な「言葉」の「死」には、いたって具体的な事象がともなっている。ローザは「第一の午後」でチャールズ・ボン(Charles Bon)を亡くし、「第二の午後」でサトペンとの結婚に同意する。本論が焦点を当てたいのは、これまでほとんど注目されてこなかった后者である。“*We’re never quite sure what prompts her to agree to marry Sutpen in the first place*”と、

デボラ・L・クラーク (Deborah L. Clark) が端的に述べているように (64)、若き処女のローザが、どうしてコールドフィールド家の「敵」として憎んでいたはずの「悪鬼」と婚約したのかということは、この作品における多くの解きがたい謎のひとつとみなされてきた。五章を論じる批評家たちは、ともすればこの謎を見て見ぬふりをするか、論及しても、これに続く二人の破局ほどには重きをおいてこなかった。だが、「三つの午後」が連続的なものである以上、「第二の午後」における婚約の意味を正しく読みとることなしに、「第三の午後」における侮辱の衝撃を理解することはできない。ローザがサトペンに愛を約束した「真の理由」を白日のもとにさらすべく、本論では「第二の午後」を徹底的に精読する。

I

本題に入るまえに、ローザに関するいくつかの誤解を正しておかなければならない。彼女に固有の思考法や世界像を歪曲して受けとってしまうと、なによりも精神的な啓示としてある「第二の午後」の存在意義が見えにくくなってしまふからである。

第一、ローザは歪んだセクシュアリティの持ち主であるという誤解。少女時代の自分に関して “*I became all polymath love’s androgynous advocate*” と述懐していることから (117)、大橋健三郎はローザの「愛」の思念は一種性倒錯的な幻覚だという (172)。だが、彼女がそのように性について語る時、身体のありのままの事実を述べているのではないことに注意すべきである。十四歳の “*a summer of wistaria*” を回想するに先立って (115)、彼女は以下のような独自の「哲学」を展開している。

That is the substance of remembering—sense, sight, smell: the muscles with which we see and hear and feel—not mind, not thought: there is no such thing as memory: the brain recalls just what the muscles grope for: no more, no less: and its resultant sum is usually incorrect and false and worthy only of the name of dream. (115)

ローザ曰く、“*mind*” や “*thought*” と並んでわざわざ “*memory*” という

「言葉」を別につくる必要はない。なぜなら、“remembering”とは、“dream”のようにあてにならない身体的な反射現象にすぎないからである。想起された身体像が「幻覚」のようなものだということを、彼女は正確に認識している。

第二、ローザはボンを愛していたという誤解。ロラン・バルト(Roland Barthes)を援用しつつローザの言説を“the traditional rhetoric of lover’s discourse”に位置づけるリンダ・カウフマン(Linda Kauffman 186)や、ジャック・デリダ(Jaques Derrida)の「差延」という概念を念頭に“Rosa balances the paradoxes of desires in the language of love”と定式化するジョン・T・マシューズ(John T. Matthews)を筆頭として(579)、ローザの恋愛観を論じる者たちは彼女とボンとの関係を重視するのが常である。しかし次の一節で繰り返され断られているように、ローザはこの姪の恋人をそもそも愛していなかった。

...because I did not love him. (How could I have, when I had never seen him?) And even if I did, not as women love, as Judith loved him, or as we thought she did. If it was love (and I still say, How could it be?) it was the way that mothers love... (118)

後に見るように、彼女はサトペンとの関係においても“mothers love”と“women love”を区別する。そしてそこでは、“women love”の方が「真の愛」として認められることになる。ボンへの愛が“mothers love”という「愛ではない愛」だったというこの判断は、したがって、サトペンを「女」として本当に愛したという経験から事後的になされたものだといってよい。ローザの恋愛観の基底には、ボンとの関係ではなくサトペンとの関係がある。愛に関する彼女のそれまでの先入観を打ち砕くのが后者であり、それは前者のように愛をめぐる既存の批評的言説に安易におさまるものではない。付け加えて、“How could I have, when I had never seen him?”という挿入句に着目したい。これは逆にいえば、「もしもボンの姿を見ていれば、本当に愛した可能性もあった」ということである。ローザにとってサトペンを「見たこと」と「愛したこと」は不可分に結びついている。

第三、ローザはクライティ(Clytie)の身体と接触することで精神的にも触れあったという誤解。問題となるのは、ボンを亡くしたばかりのジュディス(Judith)のもとに駆けつけようとしたローザが、クライティの「手」によって引きとめられる場面である。

Because there is something in the touch of flesh with flesh which abrogates, cuts sharp and straight across the devious intricate channels of decorous ordering, which enemies as well as lovers know because it makes them both:—touch and touch of that which is the citadel of the central I-Am’s private own: not spirit, soul; the liquorish and ungirdled mind is anyone’s to take in any darkened hallway of this earthly tenement. But let flesh touch with flesh, and watch the fall of all the eggshell shibboleth of caste and color too. (111-2)

この身体的接触によって、“caste and color”を守る“the eggshell shibboleth”が崩壊し、クライティとローザは“a fierce rigid umbilical cord”でつながれたようになる(112)。多くの論者は、このとき同時にローザの魂の壁も取り除かれたと考えている¹が、それは誤りである。なぜなら、ここで触れ合っているのは“the central I-Am’s private own”本体ではなく、それを防護している、“the eggshell”よりもはるかに強固な“the citadel”だからである。「精神でも魂でもない」(“not spirit, soul”)とあるように、この人種の境界の揺らぎはあくまでも“flesh”のレベルで起こった現象にすぎず、彼女の“spirit”はまったく無傷なのだ。ローザにおいてはこのように、“flesh”と“spirit”はお互いに混じりあわない別個の領域を形成している。

以上のことをはっきりさせたいので、「第二の午後」を見てゆく。

¹ 典型的な例としては、ジョゼフ・R・アーゴ(Joseph R. Urgo)とノエル・ポーク(Noel Polk)による“Touching thus cuts through decorum to reveal “the central I-am’s private own,” the spiritual essence of a human being, in the intimacy of love or hate”というコメントがある(62)。

II

ボンの葬儀の後、サトペンが南北戦争から帰還するまでの「七か月」の間(127)、ローザ・ジュディス・クライティの三人はお互いに“*interchangeable and indiscriminate*”な“*three women*”となって自給自足の共同生活を送る(125)。しかしそれでも彼らは根本的に分かりあえない“*three strangers*”なのであり(126)、いつ果てるとも知れない肉体労働を一緒におこなったところで精神的な一体感が生まれることはない(少なくともローザにとっては)。不気味なことに、彼らは「第一の午後」には何も起こらなかったかのように振る舞い、ボンの名を口にも出さない——“*...as though that afternoon had never been. But not once did we mention Charles Bon*”(127)。

そしてある日の「午後」、サトペンが戦争から帰ってくる(127)。だがこの「午後」はまだ「第二の午後」とはならない。ジュディス、クライティと順番に帰還の挨拶をしたサトペンは、続いてローザの方を見る。だがその戦争前とまったく同じサトペンの「顔」には何の“*recognition*”も浮かばず、自分の義妹のことを覚えてすらいらない様子だ(128)。彼は休む間もなく荒廃した「サトペン百マイル領地」の再建設に取りかかり、ローザも“*one of that triumvirate mother-woman*”となって「母親」のようにサトペンの世話を焼くだけの存在となる(131)。三人の女たちはめったに彼の姿を目にすることがなく、共に生活していてもサトペンは幽霊の如く実在感がない——“*The shell of him was there... Yes. He wasn't there*”(129)。ちょうどボンの存在がそうだったのと同じように。ただの肉体もローザにとっては現実味を帯びないのである。もつとも、“*At last my life is worth something, even though it only shields and guards the antic fury of an insane child*”と心のなかで思っているように(131)、ローザにとってサトペンを「子供」と見下しながら過ごすことは、少女時代の彼女がおそらくは叔母に教え込まれて待ち望むことを覚えた“*that doom which we call female victory*”の実現にはほかならず(116)、こうした「個人」としてのお互いの存在に無関心な関係のまま彼らはやっていくことも可能だったかもしれない。もしもサトペンの帰宅から「三か月」後(127)、運命的な「第二の午後」が訪れなかったならば。

And then one afternoon (I was in the garden with a hoe, where the path came up from the stable lot) I looked up and saw him looking at me. He had seen me for twenty years, but now he was looking at me; he stood there in the path looking at me, in the middle of the afternoon. That was it: that it should have been in the middle of the afternoon, ... (131)

昔から自分をどうでもよさそうに漫然と眺めてきただけの相手に、突然じつくりと見つめられた瞬間のローザの激しい驚きが、語の痙攣的な反復となって表出されている。この戸外での一対一の対面において、二人はお互いをまぎれもないひとりの「個人」として認め合った。ローザのなかにサトペンへの愛が萌芽し結婚に心が傾いた瞬間があったとすれば、それはこの特権的な昼間の一刻のほかにはない。もちろんサトペンが「正式」におこなったプロポーズをローザが受け入れるのは、その日の夜のことである。だがそれはいわば形式的なもので、二人の関係性の決定的な変化はその前にすでに起こっていたのだ。以下では、プロポーズを結婚同意の直接的な理由としたいくつかの先行研究を批判的に再検討することを通して、「第二の午後」における「見つめ合い」の重要性を浮き彫りにしてゆく。

プロポーズの言葉を述べる時、サトペンはローザの頭に「手」を載せる。デボラ・ガーフィールド (Deborah Garfield) はこの箇所に関して、“his placing of the hand upon Rosa’s head is at once a ritualistic invitation to cross the threshold of true libidinal life and a sign that the consolations of her imagined one must be abandoned” と分析している(72)。だが、先に確認したように “*caste and color*” しか解消しない身体的接触が、おなじ白人であり一応は親族の間柄であるサトペンとの関係に変化をもたらしたとは思えない。ボンへの空想的な愛 (“*the consolations of her imagined one*”) とサトペンへの愛を分かちつのは、身体的接触があったかどうかの違いではなく、実際に目と目を見合わせたかどうかの違いだ。「第二の午後」以降のサトペンのまなざしがもはやローザを「個人」としては認識していないということは、「見つめ合い」の一瞬の特権性を逆に照明している——“*he did not look at me again during the meal...he came in the door and looked*

at us” (132)。肝心のプロポーズも一対一ではなくジュディとクライティがいる前で「公的」に行われるのであり、その間、サトペンの視線はあらぬ方を眺めているのだ——“*I do not know what he looked at while he spoke*” (132)。さらにエレンの「お下がり」の指輪を新たな花婿の指にはめた新郎が夢見ているのは、未来の結婚生活ではなく過去の再現である——“*...as though in the restoration of that ring to a living finger he had turned all time back twenty years and stopped it, froze it*” (133)。これほど無味乾燥な、非ロマンティックな求婚の仕方も珍しい。だがローザもローザで、この自分よりも四十歳近く年の離れた男が明らかに “*mad*” であることを知りつつも (133)、今夜ベッドを共にすることを了承している——“*...and I mad too, for I will acquiesce, succumb; abet him and plunge down*” (133)。幸か不幸か、プロポーズを終えたサトペンは今度こそ彼女に見向きもしなくなるのだが。ローザのこうした服従的な態度は、身体的接触が “*a ritualistic invitation to cross the threshold of true libidinal life*” となって処女を性的に目覚めさせたことによるのではない。「見つめ合い」という精神的接触が、相手に身体を許してもかまわないと思わせるほどに圧倒的な力で彼女を説得したことによるのである。

ガーフィールドの議論に批判的に依拠した諏訪部浩一は、サトペンのプロポーズは「ローザにとって十分なくらいには因襲的であり、ロマンティックなもの」であったとしたうえで、「性的なものというよりも「父親的」なもの」であっただろう頭に「手」を置くという行為が、「弱い父」を憎んで南軍兵士を讃える詩を書いていた「いまだロマンティック」で「サトペンの「母親役」を果たそうとさえ考えていた彼女に「サトペン大佐の「求愛」を受諾させることになったのだろう」と述べている (441-2)。だが諏訪部がいうように、「五章におけるローザが、共同体の人々が自分のことをどう考えているかを常に正しく言語化」しており、「コンプソン氏による、彼女は無意識のうちに父親を憎んでいたのだという「洞察」」がローザにとっては「「凡庸な理解」に過ぎない」のであれば (429-30)、サトペンのプロポーズが「因襲的」であり「父親的」であるがゆえにローザを惹きつけたという説明は、まさしくコンプソン氏を始めとする「共同体の人々」が考えつきそうな外的な理由とはなりえても、ローザ自身の内的な理由とはなりえないはずだ。ローザ

が「いまだロマンティック」であった根拠として諏訪部が引用している箇所は、「第二の午後」以前の、「わがままな子供の面倒を見る三人の母親のひとり」としての愛(“*mothers love*”)に耽っていたころの心情である。「第二の午後」以後の心情は、次のようだ——“*I alone of them could say, ‘O furious mad old man, I hold no substance that will fit your dream but I can give you airy space and scope for your delirium.’*” (135-6)。これは、“*that triumvirate mother-woman*” から抜け出た「ひとりの独立した女性」としての愛(“*women love*”)である。ボンとの関係が “*I gave him nothing, which is the sum of loving*” という、何も与えないし何も受け取らない、ある意味では対称的な関係だったのに比べ(118)、ここで彼女はサトペンの “*mad dream*” の一方的な手段となることを肯っている(133)。たとえ愛する相手が見返りに何ひとつ与えてくれなくても。こうした彼女の心的態度も「いまだロマンティック」というべきなのかもしれない。しかし諏訪部の読解が、サトペンによる侮辱の場面の直前に吐露された、それゆえ侮辱を与えた「彼女のロマンティシズムにとって痛烈な打撃」(442)を際立たせるにはより適切であるはずの上のパスセージに触れていないことから、「第二の午後」以後のローザの「ロマンティシズム」はそれ以前とは質の違うものになっていると考えてよい。この変容にかかわっているのは、後に見るように、相手と目と目を見合わせることははらむリアリティである。

一方で藤平育子は、「ある日突然、サトペンに見つめられて、彼女は目が眩む思いだったに違いない」と述べており、「見つめ合い」の瞬間に着目してはいる(185)。だが、「二十歳のローザが、戦争から帰還したサトペンから求婚され、承諾してしまうのは、スピンスターになると諦めていたのに、突然、結婚の可能性が目前に降ってきたからであり、難しい理屈はなかったのではないかと、プロポーズの社会的価値の方に重点をおく(185)。この解釈は一章のローザに関してなら妥当だろう。そこで彼女は、父を失いサトペン屋敷に身をよせた当時の自分について、“*a young woman without resources, who should desire not only to justify her situation but to vindicate the honor of a family the good name of whose women has never been impugned*” と懐古していたからだ(13)。しかし藤平が述べているように、「五章を別とすれば、『アブサロム』の冒頭から最終章に至る

まで、ローザは基本的に男の眼差しによって規定される人物」であり(72)、五章が男性の価値観に縛られない「ローザの「わたし」探し」として読めるのであれば(268)、「もともとは男性優位の社会が生み出した女性蔑視の言葉」である「未婚女性(spinster)」という自己定義を他ならぬ五章のローザがそのまま受け入れており(181-2)、サトペンと結婚することでその「惨めな境遇」からの脱却をはかったとは考えにくい。脱却できたとしても、男性からは軽蔑されない女性になっただけだからである。五章のローザは明らかに、一章における南部の由緒正しき“old woman”(5)としての仮面を脱ぎ捨てている。五章の語りを特徴づけるのは、男性を含む「共同体の人々」(“they”)にたいする強烈な自意識だ。彼らが結婚についてどう思っているかをローザはよく認識しており、“wealth”や“position”や“the fear of dying manless”や“revenge”といった“a thousand specious reasons good enough for women”を列挙するのだが(128)、そういった誰もが考えそうな理由で結婚を選んだというつもりはないと断言する——“No. I hold no brief for me”(128)。「難しい理屈」ではない、どんな理屈もなしに彼女はサトペンとの結婚を承諾してしまったのである。強調されるのは、その運命的な日がやってくるまで、自分がなぜかサトペン屋敷に滞留し続けたという動かしがたい事実だ——“I could have gone home and I did not. Perhaps I should have gone home. But I did not”(128)。ロバート・デール・パーカー(Robert Dale Parker)は五章を“unspeakable monologue”と名づけたが(63)、ローザが容易に「語りえる」理屈づけを拒むのは、どうしても「語りえない」何かがあるからなのである。

以上の観察から、ローザがサトペンとの結婚を決意した分岐点がプロポーズではなく、「第二の午後」でお互いの瞳を見つめ合った瞬間であることは明らかだ。その場面を語る以前にも、自分がサトペンに“a whistled dog”のように近づいて惚れてしまったのは、“that noon when he who had been seeing me for twenty years should first raise his head and pause and look at me”のことでありと前置きしていた(128)。一瞬の「見つめ合い」が彼女の内面に何らかの強烈な影響を及ぼしたことに、もはや疑いの余地はない。しかしそれは果たしてどのようなものだろうか。

III

ながらく五章の盲点となってきたこの問題を探求してゆくにあたり、大きな手がかりとなるのは、八章における、クエンティン (Quentin) とシュリーヴ (Shreve) の「見つめ合い」である。

They stared at one another—glared rather—their quiet regular breathing vaporizing faintly and steadily in the now tomblike air. There was something curious in the way they looked at one another, curious and quiet and profoundly intent, not at all as the two young men might look at each other but almost as a youth and a very young girl might out of virginity itself—a sort of hushed and naked searching, each look burdened with youth’s immemorial obsession not with time’s dragging weight which the old live with but with its fluidity: the bright heels of all the lost moments of fifteen and sixteen. (240)

同性愛の雰囲気をも濃密に醸しているシーンだが、注意すべきなのは、“a youth” と “a very young girl” の肉体的な秘密である “virginity” が、ここでは凝視し合う “this notoriously homoerotic couple” (Pearson 344) の精神的な秘密の暗喩としてはたらいっていることだ。というのも、おし黙ってはじめての性行為おこなう若い男女を連想させる彼らの視線の絡み合い (“a sort of hushed and naked searching”) が探っているのは、精神の陰部としての「時間」だからである²。もちろんそれは、誰にとっても共通に流れる物理学的な時間ではない。老人はその “dragging weight” に、若者はその “fluidity” にとりつかれるとあるように、人によって感受のされ方が異なる実存的な「時間」である。実年齢は二十歳前後でも、精神においては “fifteen and sixteen” という年齢の “a youth” と “a very young girl”

² フォークナー曰く、“Well, when you go to the trouble to invent a private domain of your own, then you’re the master of time, too” (*Faulkner in the University* 29)。『村』(*The Hamlet*)に関する質問への応答だが、「時間」と「私的なもの」をつなぐこの思想が上の場面の核にあるように思われる。

となって向き合っている若者たちは、お互いの魂に刻みつけられたパーソナルな「時間」の痕跡(“the bright heels of all the lost moments”)をたどりなおすのだ。サトペン物語の再解釈を巡ってほしいに熱を帯びてゆく対話が、二人のあいだでこうした最深部でのコミュニケーションを可能にしたと読むことはできる。だがそうだとすると、“quiet”や“hushed”と形容される彼らの視線のやりとりは、究極的には「言葉」を超えているといつてよい。彼らがここで閲覧している、社会化される以前の自己履歴とでもいうべきものは、客観的な時間基準では測れないのと同じく、「言葉」という共同の容器に移しかえられ対象化されたとたんに失われてしまう、透明で壊れやすい性質をもつのである。

五章から遠くはなれた八章の上の場面からの類推で、ローザとサトペンの「見つめ合い」を説明することには無理があるというべきだろうか。だが、“There was something curious in the way they looked at one another, curious and quiet and profoundly intent”と描写される若者たちのまなざしと、“...looking at me with something curious and strange in his face” (131)と語られるサトペンのまなざしとは、実にそっくりである。突然見つめられて驚いたローザ自身の表情も、相手のそれによく似たものであつたらう。ほかにも多様な照応・反復関係が認められるこの小説において、フォークナーが見つめ合う人間どうしの「顔」を意図的に呼応させて描いたことは疑いをいれない。作家は、これら二組の「顔」を類似させることによって、「見つめ合い」という、五章の一人称の語りでは「語りえない」空白の出来事であつたものを、八章の三人称の語りによって客観的に解明しようとしたのだ。サトペンの「顔」の様子はつづけて次のように記録される——“the face, the same face; it was not love; I do not say that, not gentleness or pity: just a sudden over burst of light, illumination” (131)。「同じ顔」とは、戦争から帰ってきたときにはローザを認知さえしなかつた「顔」であり、“...if there was triumph, it was on the face twelve miles back there at Sutpen’s Hundred, which did not even require to see or be present” というように幼年時代の彼女が常に意識していた不在の「顔」(17)、またコンプソン氏によって“the face of a foe who did not even know that it was embattled”と評される、周囲に無関心であつたその「顔」である(50)。それとまったく「同じ

顔」が、“love”とも“gentleness”とも“pity”ともつかない奇妙に明るい表情を浮かべて一人の若い娘を注視している。「共同体の人々」であれば、この初老の男はきっと何かよからぬ考えを抱いてほくそえんでいるのだろうと憶測するかもしれない。しかし見つめられた当人はそうではないという。

I could have said that he had needed, used me; why should I rebel now, because he would use me more? but I did not say it; I could say this time, I do not know, and I would tell the truth. Because I do not know.
(131-2)

相手の内面を簡単に「語りえる」心理や動機に還元しないというこの態度は、自分自身が結婚を選んだ理由について彼女がとった態度にひとしい。サトペンと自分とのあいだに起こったことは「語りえない」ことだと彼女は直感しているのであり、「言葉」はあたかも、その「語りえない」体験のまわりに周到な防御網を張り巡らせるかのように使用されている。

では、「見つめ合い」の沈黙のうちにローザに伝達された、サトペンの「語りえない」秘密とはいったい何だろうか。八章とのパラレルで考える以上、それは“virginity”に相当するような、極度に私的かつ無傷なものではない。ローザとは異なってサトペンの生い立ちを知る読者には、それを言い当てる、ある便利な「言葉」が与えられている。七章において“His trouble was innocence”というシンプルな一文からその来歴がたどられる、“innocence”である(178)。サトペンの唯一の親友であったコンプソン将軍によれば、サトペンはこの“innocence”のせいで“the ingredients of morality were like the ingredients of pie or cake”と信じこんでしまう(221)。彼が最初の妻との離婚に際し、後々まで尾をひく“mistake”を犯すのは、この愚直な合理的ロジックのためである(215)。彼の非情なふるまいの元凶には“innocence”があったのだ。しかし忘れてはならないのは、傍から見れば人情を欠いているようでも、サトペン自身にとって“innocence”は、“morality”という、きわめて人間的なものとしてあるということである。長年の“design”

が行き詰まりになったとき、彼はこう悩む。

...let matters take the course which I know they will take and see my design complete itself quite normally and naturally and successfully to the public eye, yet to my own in such fashion as to be a mockery and a betrayal of that little boy who... (220)

彼がなにより気にかけているのは、荘園を築くという“design”の達成そのものではなく、おのれの“innocence”を自覚した昔の自分(“that little boy”)に忠実であることだ。対他的には非人間的にしか見えない彼の態度だが、対自的にはつねに“the public eye”の評価よりも“my own [eye]”の判断を重んじているという点において、モラリスティックである。コンプソン将軍がいうには、南北戦争から一時帰還した彼にそなわっているある種の気品も、いまだ失われていない“innocence”に起因する。

—and nothing of vanity, nothing comic in it either Grandfather said, because of that innocence which he had never lost because after it finally told him what to do that night he forgot about it and didn't know that he still had it. (194)

ローザが老いつつある「サトペン大佐」の瞳のなかに見たものとは、青年のころに“design”実現の大志を抱いて以来、こうして本人自身によっても気づかれることなくずっと心の奥底に眠っていた幼子のような“innocence”だ。もともと彼女は、コンプソン将軍や読者のようにそれを「言葉」によって概念的に把握したのではない。見つめ合った沈黙の一瞬のうちに、相手の魂が経てきた内的な「時間」を瞬時に遡ったのである。サトペンが“design”を思い描くようになる年齢と、ローザがボンへの憧れを膨らませるようになる年齢が、おなじ「十四歳」なのは偶然ではな

い³(「夢」を胚胎するきっかけとなるのが「家の戸口」で聞かされた「言葉」だという点でも両者は共通している(117; 190))。見つめ合う二人の若者たちが精神のレベルでは“fifteen and sixteen”の男女として対面したように、大きく年齢に差がある彼らも、見つめ合ったひとときのあいだだけは思春期に入ったばかりの精神に戻ったのだ。そして、その時点までの双方の魂の遍歴をたどりなおすことで、ある「夢」——内容こそ異なれ、ともに卑小な自己を超越する可能性にかけた「夢」——を心に抱くにいたる内的必然性をたしかめあった。一章でローザは、サトペンがエレンと結婚したのはただ“Ellen’s and our father’s names on a wedding license (or on any other patent of respectability) that people could look at and read”が欲しかったからだ⁴と決めつけていたが(11)、今ではこれが「共同体の人々」に合わせた意見にすぎないことがわかる。サトペンの秘密を知った彼女は、彼が追い求めている「夢」の内実が、“respectability”とはおよそ正反対のものであったことを了解したに違いないだろうから。

精神的な秘密を抱えていたサトペンは、身体的にも秘密を有していた。ある夜彼は、二十歳で最初に結婚するまで“virgin”だったことをコンプソン将軍に打ち明ける。うまく説明できないし信じてもらえないかもしれないが、とにかく“virgin”であることも自分の“design”に含まれていたのだ。そして相手が信じてくれたときには驚いて“*But do you?*”と聞き返すのだが、注目すべきは、そのときの彼のまなざしの様子である——“his eyes quiet and sort of bright”、“that quiet bright expression about the eyes”(200)。この奇妙な輝きをたたえた表情は、「第二の午後」でローザが目撃したものと瓜二つである。自己の秘密が他者と共有された瞬間の率直な驚きを、その「顔」はどんな「言葉」よりもはっきりと物語っているのだ。さらに付言するなら、この夜の“quiet bright expression”と、昼の“just a sudden over burst of light”という表情の明度の違いはそのまま、彼にとつ

³ テキストは「十四歳」という年齢を執拗に反復する(サトペン 40, 179, 185, 186, 193, 197, 305; ローザ 115[2回]-116[2回])。もっとも、サトペンは自分の正確な歳を覚えていないため(184)、“almost fourteen”や“either thirteen or fourteen”のように曖昧に記述されることが多い(179; 185)。だが、巻末のChronologyには、“Sutpen ran away from home. Fourteen years old”と明確に記されている(305)。

ての肉体的な隠し事(“virgin”)と精神的な隠し事(“innocence”)の比重の違いにほかならない。ハイチの砂糖農園における銃撃戦を調停するためひとりで銃弾の雨の中に出ていき、傷を負ってあやうく一生を“virgin”で過ごすことになりかけたという逸話が示唆しているように、この“indomitable spirit”の所有者の世界観において自身の“flesh”が占める割合はあたうかぎり小さかった(205)。身体と精神が極端なまでに分離しているという点で、ローザとサトペンとは実は双生児のような存在だったのである。二人の邂逅が純粹に精神的なものでなければならなかったのは、こうした事情によるはずだ。

かくしてサトペンは、二十歳で身体的な“virgin”を失った後も精神的には“innocence”を保ちつづけた。“What kind of abysmal and purblind innocence could that have been which someone told you to call virginity?”とコンプソン将軍が呆れているように(213)、サトペンにとって“innocence”とは“psychic virginity”の謂いである(Matthews 591)。それは「新品の男根」のように表象される——“just a limitless flat plain with the severe shape of his intact innocence rising from it like a monument”(192)。この“monument”としての“intact innocence”が、「第二の午後」において、ローザの魂を守る“the citadel”を陥落させ、“the central I-Am’s private own”と触れ合ったのである。五章と七章の、それぞれ別々の軌跡を描いているかのように見えた二つの孤独な魂の物語は、こうしてつかのま接合された。サトペンと目と目を交らわせた直後、ローザは次のような激しいエクスタシーを感じる。

He was gone; I did not even know that either since there is a metabolism of the spirit as well as of the entrails, in which the stored accumulations of long time burn, generate, create and break some maidenhead of the ravening meat; ay, in a second’s time;—yes, lost all the shibboleth erupting of cannot, will not, never will in one red instant’s fierce obliteration. This was my instant, ... (132)

あからさまに性的な語句(“some maidenhead of the ravening meat”、“one

red instant's fierce obliteration")に惑わされて、この衝撃が彼女の魂に生じたことであることを閑却してはならない。先の身体的接触の場面と比較してみれば、この精神的接触の深刻さは明瞭である(もちろん両者は単純な優劣関係にはないが)。クライティと身体的に触れ合ったとき、ローザは“*shibboleth*”が崩れさるのを感じるのだが、結局、相手ではなく何らかの実体のない“*it*”にむかって“*Take your hand off me, nigger!*”という“*shibboleth*”を発する(112)。それに対してサトペンと精神的に触れ合ってしまった彼女は、通常犯されそうな女性が叫ぶどんな“*shibboleth*”(“*cannot, will not, never will*”)をも口にすることができない。「言葉」を彼女から完全に奪ってしまうのは、精神的接触の方だ。この後茫然としたままサトペンとの夕食の席についた自分について、ローザはこう語る——“*I might have said then, To what deluded sewer-gush of dreaming does the incorrigible flesh betray us: but I did not*”(132)。彼女は予想もしなかった相手との精神的な結合を、性欲という“*the incorrigible flesh*”の欲望として片づけてしまいたいのだが、そうすることはできない。サトペンにプロポーズされたときも、望みさえすれば“*‘No! No!’ and ‘Help’ ‘Save me!’*”と叫びだせたにもかかわらず、ただ黙って受け入れてしまう(132)。小説冒頭から“*the rank smell of female old flesh long embattled in virginity*”を漂わせているローザだが(4)、二十歳のときにじつは魂の“*virginity*”を喪失していたのである。

IV

「第二の午後」から「第三の午後」までの「二か月間」は(133)、ローザの内なる魂が生涯でもっとも生き生きと過ごした期間だといってよい。彼女は“*a metabolism of the spirit*”を体験し、サトペンに対する幼少期かの根ぶかい固定観念(“*the stored accumulations of long time*”)を完全に洗い流したのだ。コールドフィールド一家の末裔としての“*pride and principle*”が消滅したのはこの瞬間である。“*...no ogre, because it was dead, vanished, consumed somewhere in flame and sulphur-reek perhaps among the lonely craggy peaks of my childhood's solitary remembering—or forgetting*”とあるように(135)、昔なじみの「悪鬼」としてのサトペン像

は“remembering”のどこか遠くに葬りさられた。「remembering」とは、“dream”のようにあてにならない身体的な反射現象にすぎない」という独特な記憶観は、この生の体験に由来している。そして記憶が身体的なものにすぎない以上、サトペンが以前とおなじ“*the body, the face, with the right name and memory*”を持っていたところで問題にはならない(135)。なぜなら彼女は、そうした身体的、外的なものいっさいの背後にひそむ彼の汚れのない魂を垣間見たのであり、彼女にとってはそれがすべてだからである。

ローザが夢見るのは、サトペンの“*the lonely and foredoomed and indomitable iron spirit*”にとっての“sun”となることだ(135)。こうした彼女の心性はしかし、単純に「ロマンティック」なものではけっしてない。「見詰め合い」という抜きさしならない現実のできごとに根をもつサトペンへの愛は、自己愛の反映としてのボンへの憧れ(“...*who will dispute me when I say, Why did I not invent, create it?*”)とも(118)、その延長線上にある、サトペンを「子供」扱いする「母親」としての感情とも異なっており、たしかに自分の外に実在するもうひとつの魂をめぐらしている。その愛は、“*the pallid name of love*”と呼ばれているように(135)、愛という「言葉」さえもかすんで見えさせる愛だ(ここから、「第一の午後」で死んだ“love”はただの「言葉」だったことがわかる)。そして自分以外の魂への愛を知ったことで、ローザはきっと、自分自身の魂にも光が差しこんできた気がしたに違いない。出生と同時に母親を亡くしたローザの少女時代は、かぎりなく暗いものであった。

I lurked, unapprehended as though, shod with the very damp and velvet silence of the womb, I displaced no air, gave off no betraying sound, from one closed forbidden door to the next and so acquired all I knew of that light and space in which people moved and breathed as I (that same child) might have gained conception of the sun from seeing it through a piece of smoky glass... (116)

人の生きる外界から疎外された、こうした自閉的な精神状態を、二十歳に

なった彼女は依然として抜けることができないでいた——“...turned twenty true enough yet still a child, still living in that womb-like corridor” (131)。このことを考慮したとき、「第二の午後」におけるサトペンの姿は、その瞬間の彼女自身の魂のありようをも語っているように思われる——“...the path at the instant when he came in sight of me had been a swamp out of which he had emerged without having been forewarned that he was about to enter light” (131)。つねに “a piece of smoky glass” を通して “sun” を眺めてきたような薄暗い魂にとって、いつか自分がだれかの “light” となり “sun” となりうるとは夢にも思わないことだっただろう。サトペンの「顔」を内側から照り輝かした “light” は、その意味で、彼女自身の魂をも救済した光なのである。

思わぬかたちで思わぬ相手にたいして抱くことになった愛を、若きローザは心のなかで大切に育て上げた。このあとには「第三の午後」という悲劇が控えているとしても、「第二の午後」という僥倖がまずはあったという事実は揺るがない。というより、そもそも愛する人間の魂の本質をつかんだという確信がなければ、その相手から受けた侮辱が精神にとって致命的な痛手となることはないはずだ。『アブサロム』を形づくる全九章のうち、構成的に中心に位置するのが五章であり、その五章がさらに宿命的な「三つの午後」を柱とするのであれば、「第二の午後」はこの重層的な作品のまさしく中心の中心にそびえ立っている。小説の核心に秘められているのは怒りでも憎しみでもない、およそ他者と結ばれることなどありえないように思われた二つの孤独な魂を架橋する愛なのだ。形式上のこの配慮は、五章と七・八章の符合とあいまって、ローザの目にした明るい表情を浮かべたサトペン像が、彼女の主観的眞実にとどまるものではなく、むしろほかの語り手たちのサトペン像以上にこの作品総体の理解に欠かすことができないものであることの証左といえよう。いま必要とされているのは、「第二の午後」を加味した、より包括的な『アブサロム』論である。

引用文献

Clarke, Deborah L. “Familiar and Fantastic: Women in *Absalom, Absalom!*” *The*

- Faulkner Journal*, vol. 2, no. 1, 1986, pp. 62-72.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!* 1936. Vintage, 1990.
- . *Faulkner in the University*, edited by Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, U of Virginia P, 1959.
- Garfield, Deborah. “To Love as “Fiery Ancients” Would: Eros, Narrative and Rosa Coldfield in *Absalom, Absalom!*” *The Sothern Literary Journal*, vol. 22, no. 1, 1989, pp. 61-79.
- Matthews, John T. “The Marriage of Speaking and Hearing in *Absalom, Absalom!*” *ELH*, vol. 47, no. 3, 1980, pp. 575-594.
- Kauffman, Linda. “Devious Channels of Decorous Ordering: A Lover’s Discourse in *Absalom, Absalom!*” *Modern Fiction Studies*, vol. 29, no. 2, 1983, pp. 183-200.
- Parker, Robert Dale. *Absalom, Absalom!: The Questioning of Fictions*. Twayne, 1991.
- Pearson, Erin. “Faulkner’s Cryptic Closet: Forbidden Desire, Disavowal, and the “Dark House” at the Heart of *Absalom, Absalom!*” *The Mississippi Quarterly*, 2011, vol. 64, no. 3-4, pp. 341-368.
- Polk, Noel. Urgo, Joseph R. *Reading Faulkner: Absalom, Absalom! UP of Mississippi*, 2010.
- 大橋健三郎『フォークナー研究——「物語」の解体と構築』南雲堂、1979年。
- 諏訪部浩一『ウィリアム・フォークナーの詩学 1930-1936』松栢社、2008年。
- 藤平育子『フォークナーのアメリカ幻想——『アブサロム、アブサロム！』の真実』研究社、2008年。